

論文

学生インターンシップ受入れ地域での意識調査と実績評価

田中 宏美

Awareness Survey and Performance Evaluation at the Acceptance Region of Internship

TANAKA Hiromi

要 旨

中山間地域への外部人材派遣について、学生を起用した事例を対象として地域の受入れ態勢と住民意識を調査した。受入れ態勢は学生と住民が接するための手段に影響を及ぼした。また、本稿では受入れ態勢の形態を「単身／調査型」と「共同／体験型」に区別した。成果報告書から抽出した意見を評価項目として検証した結果、受入れ態勢は学生インターンシップ実施後の住民意識に影響を及ぼした。これらのことから、事前準備として受入れ態勢の的確な設定が必要と考えられた。

キーワード：地域インターンシップ、中山間地域、外部人材、住民意識、過疎・高齢化対策

I はじめに

全国的に人口の減少と高齢化が進む中、中山間地域においては担い手不足が深刻化し、地域活動を維持できない集落がみられる。その要因には、次の世代を担う 10 代後半から 20 代前半の若者が、進学や就職を機に都市へ流出している現状がある。

これに対する国の政策の一つとして、2009 年より「地域おこし協力隊」や、「田舎で働き隊」といった外部人材による地域の活性化が試みられている。また、それ以前から都市部の若者と農村との交流により、得られた感想や提言を地域の活性化に活かし、若者の UJI ターンの動機づけにすることをねらい、国や自治体、NPO など様々な運営主体によって地域インターンシップ制度が取り組まれている¹⁾。

今後も増加することが期待される外部人材の活用や地域インターンの運用にあたり、その人材を地域が効果的に受入れるノウハウを整理、蓄積することは重要である。本研究では、島根県中山間地域研究センターが実施した「平成 27 年度夏休み学生地域づくりインターンシップ事業（以下、『学生インターン』と略記）」において、受

入れ態勢が異なる 4 つの地域で住民意識を分析し、学生インターンがもたらす「効果」と「課題」について考察した。

II 学生インターン制度の概要と評価方法

1. 実施条件

本制度は当センターが実施主体となり、平成 26 年度から開始した。対象地域は島根県内の離島、又は中山間地域で、公民館区や小学校区で区切られる地区とした。インターン対象者は大学生、大学院生、短大生、専門学校生、高等専門学校生で、対象人数は受入れ地域や学生の希望に応じて地域毎に 1～数名とした。受入れ期間は学生が夏季の長期休暇を利用できる約 1 ヶ月間とした。学生にはこの間、受入れ地域で生活し、地域住民とともに地域づくりに伴う様々な活動に取り組むことを課した。活動は 1 週間のうち 5 日程度とし、活動期間の後半には地域住民に向けた成果発表を計画した。また、学生には生活費として、活動日一日当たり 4,000 円を当センターから支給した。

2. 役割分担

地域の役割は、事前準備として①学生へのミッション（地域から学生に課す、インターン期間中に達成してほしい目標）の設定、②ミッションを達成するための活動の用意、③学生がお世話になる個人や組織への連絡や調整、④学生の活動スケジュール作成、⑤住居を確保するための交渉を含む住環境の準備、⑥地域住民への周知である。さらに、インターン実施期間においては⑦現地へ学生を送迎するなどの活動サポート、⑧学生の個性や意見を反映させた活動内容の最終決定や、スケジュールの最終調整を担った。また、インターン終了後には⑨成果報告書^[1]を作成して頂いた。

学生の役割は①地域で生活、住民と共に行うミッション達成に向けた活動、②インターン活動で得られた発見を地域に還元するという目的で、地域住民に対して行う成果発表と「地域の魅力ポスター」の作成、③日誌、活動簿、成果報告書^[1]の作成である。なお、活動内容は予め地域で用意されたものが基本となるが、学生の関心や希望を反映して活動に取り入れることも可能であり、学生は必ずしも受け身的な立場ではない。地域によってはむしろ、学生の主体性を重視する例もみられた。

当センターの役割は①学生インターン制度を地域に説明、②受入れ地域の採択、③学生募集、④学校との事務手続きなど実施に向けた調整、⑤学生と地域のサポートである。

3. 学生インターン受入れ地域の選定条件

受入れ準備の段階から計画などが把握でき、インターン終了後においても継続して当センターが支援可能と判断できる地域を候補とした。さらに、実施地域の決定は①学生インターンに対応する責任者がいること、②学生が1ヶ月間滞在する住居が用意できること、③学生に担ってほしいミッションが用意されていること、④受入に積極的であることの4点を重視して選定した。

4. 評価方法

平成27年度は7地域で学生インターンが実施されたが、本稿では、筆者がインターン実施期間中に地域を訪れ、実施状況などを詳しく聞き取ることができた4地域、9名の学生を評価対象とした（表1）。

各地域の受入れ態勢として①住環境の提供方法、②設定されたミッションの内容、③用意された活動内容、また実施状況として④学生と住民とが接触する機会を確認した。

地域の代表者から提出された成果報告書^[1]を分析し、学生インターンの評価につながる住民の意見を抽出した。これらの意見は、学生インターン実施による良い影響や好意的な印象を「効果」とし、不足していたことや改善点を述べた意見を「課題」として整理した。

表1 対象地域の基本情報

地域	A	B	C	D
人口（人）	913	212	569	878
世帯数（戸）	331	89	200	367
高齢化率（%）	38	51	42	47

Ⅲ 学生インターンの評価

1. 受入れ態勢の実態

地域による受入れ態勢として①住環境、②ミッション、③活動内容、また学生と住民が接触する機会として④主な接点について、地域毎に整理して表2に示した。

A 地域では、①住環境は空き家2軒にそれぞれ男性1名、女性2名（同居）で住み込み、自炊を基本とした。②ミッションは「UIターン者に向けた地域の仕組みと習慣を魅力と共にまとめた地域暮らしのマニュアル作り」と具体的に設けられ、それに向けた③活動内容は住民への聞き取り調査が中心であった。④主な接点は③活動内容に関連して、聞き取り調査や地域行事への参加により、広く住民とコミュニケーションの機会がとられていたといえる。

B 地域では、①住環境はA地域と同じく、自炊を基本とし、1軒の空き家で女性2名が生活した。②ミッションは「地域を盛り上げていくためのヒント探し」と抽象的に設けられ、それに向けた③活動内容はA地域と同様に、住民への聞き取り調査が中心であった。B地域に特徴的であったのは、島根大学フィールドワークでの交流、中間成果報告会の実施であった。④主な接点はA地域と同様に、③活動内容に関連して、聞き取り調査や地域行事への参加により、広く住民とコミュニケーションの機会がとられていたといえる。

表2 地域ごとの受入れ態勢と学生の活動

	A 地域	B 地域	C 地域	D 地域
①住環境 (注1)	空き家(自炊)	空き家(自炊)	家主宅の離れ(食事などは家主の支援)	①ホームステイ ②公共施設に宿泊(食事などは住民の支援)
②ミッション (注1)	地域の仕組みと習慣を魅力と共にまとめた地域暮らしのマニュアル作り(抜粋)	地域を盛り上げていくためのヒント探し	地域のお宝・魅力・資源の発掘	地域の「強み」となる資源を見つけ、元気な地域づくりのための企画を立てる(抜粋)
③活動内容 (注1)	住民からの聞き取り 若者集会への参加 週1回のミーティング 地域行事への参加 成果発表	住民からの聞き取り 住民組織会議へ参加 週1回のミーティング 地域行事への参加 島根大学との交流 GIS操作の習得 中間成果報告会 成果発表	農作業の体験 住民組織会議や地域活動への参加 地域行事への参加 成果発表	農作業の手伝い 若者組織会議への参加 子ども教室への参加 紙すき体験 地域行事への参加 地域のマップ作成 成果発表
④主な接点 (注2)	<u>特定の人との接触</u> 聞き取り調査 集会・ミーティング <u>多数の人との接触</u> 歓迎会・送別会 地域行事 成果発表会	<u>特定の人との接触</u> 聞き取り調査 会議・ミーティング <u>多数の人との接触</u> 歓迎会・送別会 地域行事 中間成果報告会 成果発表会	<u>特定の人との接触</u> 農作業 会議・地域活動 生活の一部を共有 <u>多数の人との接触</u> 歓迎会・送別会 地域行事 成果発表会	<u>特定の人との接触</u> 農作業 会議 子ども教室 ホームステイ <u>多数の人との接触</u> 送別会 地域行事 成果発表会

(注1) ①住環境, ②ミッション, ③活動内容は地域によって事前準備として設定された受入れ態勢

(注2) ④主な接点は, 学生と住民の接触機会が得られた実際の行動内容

また, A 地域と B 地域に共通した③活動内容として, 週に1回のミーティングが設けられた。これにより, 当初の活動計画が学生の意向や活動の進捗に応じて柔軟に変更されていた。

C 地域では, ①住環境は家主となる住民の離れに男性1名が宿泊し, 風呂, 食事といった生活機能の一部は母屋でお世話になるという形態がとられていた。②ミッションは「地域のお宝・魅力・資源の発掘」と抽象的に設けられ, それに向けた③活動内容は, 家畜の世話や水田の除草など農作業の体験, 住民組織の活動や行事への参加など, 地域内の活動を広く体験することであった。④主な接点は①住環境に関連して, 家主との関係性が比較的濃い傾向にあり, また③活動内容に関連して, 体験活動を通して広く住民とコミュニケーションの機会がとられていたといえる。

D 地域では, ①住環境は複数の住民宅へ男性3名が個別に, あるいは3名と一緒にホームステイし, 期間の後半には公共施設も利用した。なお, 施設宿泊の場合, 風

呂と食事は住民のお世話になった。②ミッションは「地域の豊かな自然の中で, 思いやり, 支えあい, 生き生きと暮らせるまちづくりに繋がる『強み』となる資源を見つけ, 元気な地域づくりのための企画を立てる」と抽象的に設定された。それに向けた③活動内容は農作業の他, 地域ぐるみで子どもを見守る活動への参加や, 紙すきなど地域伝統工芸の体験, 若者組織会議への参加, 地域を巡回して「ええとこマップ」の作成が計画された。④主な接点はC地域と同様に, ①住環境に関連して, 家主との関係性が比較的濃い傾向にあり, また③活動内容に関連して, 体験活動を通して広く住民とコミュニケーションの機会がとられていたといえる。

4 地域の受入れ態勢を整理してみると, 地域が事前準備として設定した②ミッションと, それを達成するために用意された③活動内容が関連していることは言うまでもないが, ④主な接点は③活動内容に基づいて生じ, また①住環境の影響を受ける傾向がみられた。いずれの地域とも受入れ態勢が学生と住民の接点に関して手段, 範

困、程度に影響を及ぼしており、学生の基本的な行動を決定したと考えられる。したがって、学生インターンで期待する効果を得るためには、受入れ態勢の設定が重要である。なお、A地域とB地域、C地域とD地域は受入れ態勢が異なる2タイプに区別することができ、本稿ではそれぞれの形態を「単身／調査型」、「共同／体験型」と定義する。「単身」と「共同」とは、住環境の条件として前者は空き家での自炊、後者は住民と共同生活したことを指す。

2. 住民意識の分析

成果報告書から抽出した意見を、「効果」と「課題」に分けて表3に示した。学生インターンに対する住民意識は、概して以下に述べる8項目に分類することができ、これらを実評価項目として各地域の住民意識を分析した。

- I. 地域資源の再評価
- II. モチベーションの向上・刺激
- III. 地域づくりへの提案と実践
- IV. 地域づくり組織への貢献
- V. 誇りの醸成
- VI. 学生と地域住民の信頼関係の醸成
- VII. 地域活性化への動き
- VIII. インターン体制と運営

I 地域資源の再評価、II モチベーションの向上・刺激、V 誇りの醸成は、地域が若い外部人材と接する機会を持てたこと、また学生によって外部から見た地域の印象を知らされたことが刺激となり、これらが地域の再発見や自信につながり、項目毎に2~4地域で「効果」とされる意見が見られた。

III 地域づくりへの提案と実践は、学生が取り組んだ活動や提案自体が「効果」とされるとされる意見が3地域で見られた。しかし一方では、この3地域のいずれも、活動や提案に対する成果について、もっと地域の問題点を掘り起こして欲しかった、学生と地域に温度差があった、活動期間が不足していたなどの「課題」が示された。

IV 地域づくり組織への貢献は、学生インターンを実施するに至る過程が地域にとって良いものであったとの意見から、1地域で「効果」とされた。

VI 学生と地域住民の信頼関係の醸成は、学生が地域での活動を熱心に取り組む姿勢に対して、住民の好意的な

意見が2地域で確認でき、これを「効果」とされた。

VII 地域活性化への動きは、学生インターンによって住民どうしの積極的な協力関係が生まれるきっかけとなり、1地域で「効果」として評価された。しかし一方では、「課題」が2地域で確認されて、理由はいずれも短期間の限定的な活動では直ちに変化が見られないとの意見であった。

VIII インターン体制と運営は、他の項目とは視点が異なり、受入れ態勢を含めた学生インターン制度や自分たちの運用手法に関する意見であった。すべての地域が「効果」と「課題」の両方について言及された。「効果」としては、打合せ、調整、連携が実行できたことであった。「課題」としては、スケジュール調整、住民の役割分担、ミッション設定などへの反省点が示された。

これらはいずれも住民からの具体的な意見であり、効果が得られるように受入れ態勢を設定する必要があることや、運用面で改善すべき点があることなど、自ら実感されていることを確認できた。また、「課題」として意見を抽出したのはIII 地域づくりへの提案と実践、VII 地域活性化への動き、VIII インターン体制と運営の3項目であり、住民意識は概して若者に対しては好意的であったが、実践や運用面で不満が残される傾向にあった。

3. 受入れ態勢と住民意識の関係

受入れ態勢の形態として、前述した「単身／調査型」と「共同／体験型」に区別して「効果」、又は「課題」と評価された理由を考察する。

III 地域づくりへの提案と実践について「単身／調査型」のA地域とB地域は、「課題」として問題点の掘り起こしが不十分なことや、実施時間の短さとされた。これに対して、「共同／体験型」のD地域では学生と住民の温度差が「課題」とされた。「単身／調査型」は活動内容にミーティングや、意見交換を十分に設けていたため温度差は感じられなかったものの、「もう少し深い活動ができたのでは？」との反省がうかがえる。また、D地域では農作業などの体験に加えてマップを作成することが時間的に困難となったことから、活動内容の設定が不適であったと考えられる。「共同／体験型」のC地域では「効果」、「課題」のどちらも示されなかった。これは、体験型の活動が多く、聞き取り調査の結果報告やマップ作成のよ

表3 学生インターン導入における地域ごとの評価

項目（基準）	評価	単身／調査型		共同／体験型	
		A地域	B地域	C地域	D地域
I 地域資源の再評価	効果	学生に接した住民は地域を見直す機会になった。	普段の生活では気付かない事を教えてもらった。	外部の目を通して地域の長所・短所を発見できた。	
	課題				
II モチベーションの向上・刺激	効果	多くの住民の刺激になった。	地元の若者が地域を意識し、実施できることを考えるきっかけになった。	活動に取り組む団体の刺激になった。	個人と団体の刺激になった。若者のやる気がでた。
	課題				
III 地域づくりへ提案と実践	効果	地域の特徴と、地域づくりへの提言が聞けた。	ミッションが達成された。地域の現状と課題の分析が参考になった。		地域づくりへの提言が参考になった。
	課題	もっと地域の問題点を掘り起こしてほしかった。	時間があれば、課題解決の対策と一緒に検討したかった。		マップ作成に関して、学生と住民に温度差があった。
IV 地域づくり組織への貢献	効果		地域づくり活動の一環として協議・実施したことが成果。		
	課題				
V 誇りの醸成	効果	地域の長所が開けて、自信・希望が持てた。定期的に若者との交流が必要。		地域の魅力が開けるのは嬉しく、それを目標として捉え、向上心につながる。	
	課題				
VI 学生と地域住民の信頼関係の醸成	効果			若者の良い素質を見た。初体験の作業に、素直に取り組む姿勢に感銘した。	共同生活の中で、若者の田舎に対する熱い思いを知ることができた。
	課題				
VII 地域活性化への動き	効果				住民の多くが積極的に学生と関わり、協力し、それこそが活性化だと感じた。
	課題	直ちに大きな変化は見られない。		短期間に、限定的な活動のため、直ちに大きな変化は見られない。	
VIII インターン体制と運営	効果	全体計画の不備を週単位で調整したことは正解だった。	学生とのミーティングが多かったことは正解だった。	住居が早く決まり、その後の計画作成がスムーズだった。	複数宅が民泊を快諾され、住民間の連携が見られた。
	課題	地域活動の中心人物との日程調整が難しかった。当初の想定と活動内容が合致していたか疑問。	地域マネージャーの負担が大きく、適正な役割分担が必要だった。	抽象的なミッション設定ではなく、直面する課題を示すことで、関心の高い学生に出会えると思う。	ミッションに対して適当な活動であったか疑問。インターンの理解不足で学生の希望把握が遅れた。

空欄は成果報告書からの意見抽出なし

うに、目に見える成果を提示する活動ではなかったことが要因と推察される。

VI学生と地域住民の信頼関係の醸成は、「共同／体験型」のC地域とD地域で「効果」として示された。これは「単身／調査型」のA地域、B地域と比較して、学生と住民とのコミュニケーションが密接に保たれていたことが要因と推察される。

VII地域活性化への動きは、「共同／体験型」のD地域のみで「効果」が示された。D地域が他の地域と異なっていたのは、学生が複数の住民宅でホームステイしたことであり、住民間で相互協力や情報共有されたことが積極的な印象となり、評価につながったと推察される。

これらのことから、III地域づくりへの提案と実践、VI学生と地域住民の信頼関係の醸成、VII地域活性化への動きは、受入れ態勢の形態として区別した「単身／調査型」と「共同／体験型」の違いが、住民による評価結果に影響が及ぼしたと考えられる。

IV まとめ

学生インターン実施地域の受入れ態勢を整理した上で、学生が地域住民と接する機会を確認した結果、受入れ態勢によって学生の行動が助長、又は制限され、学生の基本的な行動が決定されていた。

実施地域が作成した成果報告書から主な意見を抽出し、整理することで住民意識の詳細を知ることができ、本稿ではその意見を評価項目として利用した。評価項目は8通りで、項目によっては同一地域から「効果」と「課題」の両方の意見が得られた場合もあり興味深い。

受入れ態勢の形態を「単身／調査型」と「共同／体験型」に大別して検証すると、評価項目のうち「地域づくりへの提案と実践」、「学生と地域住民の信頼関係の醸成」、「地域活性化への動き」の3項目は受入れ態勢の影響を受けることが示唆された。

これらのことから、受入れ態勢は期待する効果を得るための重要な前提条件と考える。また、学生インターン実施地域が作成した成果報告書から住民の意見を抽出して、「効果」と「課題」にあてはめることで、適正な評価が判定できると考える。

V おわりに

本研究は、外部人材導入の一手段として地域インターンに注目し、当センターが実施した学生を派遣する事業においてノウハウの整理、蓄積を目的とした。そして本稿は、学生インターンの実績を報告すると同時に、学生インターン制度の評価手法についても提言した。

今回の学生インターンでは、地域の役割をあらかじめ定めておき、実施地域の選定には受入れ態勢が整えられていることを条件の一つとしたが、この実施要領は今後も採用すべきと考える。また、実施地域が作成する成果報告書には学生インターンを評価するための有益な情報が記載されており、報告書を作成して頂くこと、続いて報告書を分析することは今後も継続すべきである。

今後の課題として、実施地域が作成する成果報告書へは、住民一人一人の意見が反映されているかが重要であり、意見集約の方法が適正であるかを確認し、問題点があれば改善する必要がある。また、学生が作成する成果報告書を分析するなど、他の情報も取り入れ、本稿で示した評価8項目の適否と、追加項目の抽出について検討が必要である。

最後に、外部人材として学生を起用する最も大きな効果は、地域住民が若者の発想や提言を聞くことで新たな展開へのきっかけになることである。また、学生は地域で生活し、住民と一緒に活動することで中山間地域の現状を理解し、地域づくりの手法を地域から学び取ってほしい。学生インターンシップが多くの地域で、効果的に取り組まれることを期待し、本稿はその一助としたい。

VI 謝辞

本研究を実施するにあたり、受入れた学生を温かく見守って頂き、ご指導頂いた地域の皆さま、地域での活動を最後までやり遂げられた学生の皆さま、ならびに学生と地域との間で事業の企画、運営をサポートして頂いた関係者の皆さまに深くお礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 横山玖洙・中塚雅也 (2008) 地域インターンシップ制度の設計に関するアクションリサーチ. 神戸大学農業経済 40 : 23-32.

注

[1] 成果報告書は、学生インターンが地域に及ぼす影響を知り、これを研究に活かすため、当センターが様式を作成して地域と学生の双方に作成を求めた。内容は学生インターン実施前後で気づいた変化など、いくつ

かの質問に対して主に記述式で答えて頂いた。地域側の報告者は、地域づくりを担う組織の会長や役員、集落支援員、学生インターン責任者などで、1地域につき1～数名にご協力頂いた。

ABSTRACT

Consciousness Investigation and Result Evaluation in the Acceptance Region for Student Internship

TANAKA Hiromi

Cases on the appointment of students for external staffing into the hilly and mountainous areas were investigated about the acceptance attitude of regions and the inhabitant consciousness. The acceptance attitude affected the means for contact between students and inhabitant. Further in this paper, forms of the acceptance attitude distinguished to "single / research type" and "joint / experience type". Results of analysis of the extracted opinion from the achievement reports as the evaluation items, the acceptance attitude had affect inhabitant consciousness after the student internship. In conclusion, it was considered that precise setting of the acceptance attitude as advance preparation was necessary.

Keywords : rural community development internship program, hilly and mountainous areas, external human resources, inhabitant consciousness, depopulation and aging measures